
 シンポジウム

論題：中世哲学におけるプラトニズム

——特に善の問題を中心にして——

司会 宮内 璋

I

中世哲学会第25回大会（昭和51年11月，於南山大学）における表記の論題によるシンポジウムは，論点は異なっているが題材の共通性から明らかな如く，前回（第24回大会，昭和50年11月，於九州大学）を承けて行なわれたものである。それは，前回の司会者稲垣良典氏の報告に述べられている如く（本誌 XVIII 号），第一に「中世哲学とプラトニズム」という主題が，到底ただ一回の討論を以てしては，そこに含まれている諸々の問題の主要なものに触れることさえ不可能であることに，そして第二には，中世における知的総合の時期ともいべき13・4世紀について今回は触れ得なかったことが大きな欠落として，多くの人の遺憾とするところであったことによるものである。他方，概括的な問題の列挙や，個々の問題についての所謂プラトン流の取扱い等の論議よりも，中世における哲学の核心がどのようにプラトンの哲学にかかわりを持つものとして形成されているのか，そしてそのような発現を通して更にプラトニズムとは何であるのかとの問いに遡源すること，即ち，哲学そのものとして両者を問うことが委員会における強い要請であった。又，問いの核心が十分に照射展開され，焦点が浮び上るためには，提題の数を限定することがむしろ望ましいと思われた。勿論このことと関連して，シンポジウムという討論形式から考えて，単なる質問というよりは，それ自身主張を伴った討論を可能にするための時間的余裕という配慮もあった。

お二方の提題者，アンセルムスについて論ぜられた泉治典氏と，トマスについて語られたリーゼンフーバー氏，の主張は，dramatic な対照をなしていたとも言え

るのではないかと思われるが、そのことによって我々には、プラトニズムの焦点が、アンセルムスとトマスにおいて火花の如く燃焼するのをかい間見ることが出来たのではなかろうか。以下、提題者ご自身の二回に渉る要約と若干重複するが、討論の運びについての私自身の理解を、その未熟と誤まりを恐れずに提出することによって、司会者の責を果したいと思う。

II

泉氏は、アンセルムスの思考の特質（氏の言葉によれば「神学的特質」）を意識して対照的に明らかにするために、アンセルムスにおける Entplatonisierung を強調し、プラトニズムなき神学は可能であろうか、との問いを基本に据え、「モノロギオン」「プロスロギオン」「クール・デウス・ホモ」の分析によってその主張を展開した。そして、一般にアンセルムスが出発点を同じくしているとされ、彼自身も一致を強調しているアウグスティヌスとの対比が展開の主潮をなしていた。この視点によれば、アウグスティヌスにおいては、「三合一論」の神学と彼のプラトニ的思惟とは並行線をなし、緊密な結合には達していない。creatio ex nihilo についても、アウグスティヌスは、結局 formatio という二元的把握に終わっているのに対し、アンセルムスにはこの formatio による説明は全くない。ex nihilo の ex には如何なる原因性もなく、在るもの—nihil の並存も、不変性—可変性の対比による説明も一切見出されない。知解を否むこの paradox, creatio ex nihilo の存在根拠、認識根拠にかかわるこの paradox と analogia（「言葉による表出」rerum quaedam in ipsa ratione locutio, *Mon.* cap. X. にあらわれる）の衝突は、ひとり神の絶対的自己肯定のみによって超えられる。このことは、「それよりもより大いなるものを考えることは出来ないもの (id ipsum quo maius cogitari nequit)」から「その非存在を考えることの出来ないもの (nec cogitari possit non esse)」へと展開する「プロスロギオン」2—4章における神の存在証明にはっきり現われている。即ちそこでは、实在可能性から、存在具体性と存在必然性とを同時に担う神の現実性 (actuality) が指示されているのであり、可能性の極限を示す analogia に対して、paradox に直面しつつ、それに直面することによって、正に可能性を現実化する神の絶対的現実性が指示されている、とされる。このことは更に、償い (redemptio)

の根拠としての *Deus-Homo* の現実性において現われる。即ちここでも、実現可能な可能性 *Deus-Homo* を現実化し、救済を全うする *Honor Dei* (*justitia* と *miseri-cordia*) のみが神と人との *Gegenüber* を克服し、罪によって損われた *Honor Dei* を回復し、創造の究極目的(救済即ちそれ自身 *Honor Dei*) を全うする。この「クール・デウス・ホモ」Ⅰ, Ⅱの対話(それは神と人との対話を象徴する)による展開は推論的思考(*ratio*)によってではなく、*intellectus* による必然性の証明である。この *Honor Dei* に対応する神の善の無限性 (*immensa bonitas*) の根拠は神の自由である。以上の展開に見られる如く、アンセルムスにおいては、アイデアを媒介とする神認識はなく、又、プラトニズムの中核をなす *participatio* による存在把握、存在論的構造を持つ善の認識、ひいては最高善の認識について語られることはない。以上によって泉氏は、アンセルムスにおける *Entplatonisierung* を、少くともその傾きの重要性を強調する。

リーゼンフーバー氏によれば、トマスにおいてプラトンの要素(ネオプラトニズムを含む意味で)は殆どすべて、神と世界との関係にかかわっており、神の存在証明においてはアリストテレスの原因論が用いられているが、それは一つには *creatura* の自主性を強調するためであり、他には分有の形式構造を明らかにするためであって、神を多数者を前提とする一者として理解したり、世界内的な完全性の規準として最高の存在者を証示する時には、彼はプラトンの範型因的思考を採用している。又、神の名として *unum*, とりわけ *bonum* を立てる時 (*bonitas pura, ipsa essentia bonitatis, ipsum bonum*) 明らかにトマスは、形相として存在を把握するネオプラトニズムの伝統に依っている。これに対して *esse subsistens* という神概念は、分有可能な完全性(単純, 充実)として存在を理解するトマス独自の思想であり、プラトン, アリストテレスのトマスの融合である。このことは *quarta via* においても顕著である。ネオプラトニズムは有限的存在者の絶対者からの起源を流出という必然的過程によって基礎付けようとするが、トマスは偽ディオニシウスを承けてこれをキリスト教的創造の意味で解釈する。この創造の原理的構造を示しているのがネオプラトニズムの共通有 (*esse commune*) の、善としての神の愛による自己譲渡たる流出であり、この流出そのものが分有 (*participatio*) の始まりである(これに対して第一のものたる神そのものは分有不可能なものとして、神の絶対的超越性、

神と被造物との絶対的差異を示す)。ここから構成されて行く個々の存在者は、この分有によって神との類似性 (similitudo) をその形相のうちに刻印されている。この similitudo は、すべての存在者の存在に先立つ第一の similitudo であって、これによってあらゆる存在者相互の協和的関連も成立しているのである。又、この similitudo は、同時に、差異を含意するものとして、すべての被造物の存在者としての存在との緊張関係を示すものである。このネオプラトニズムの創造の解釈によって、ipsum bonum は神自身であり、被造物にとって神はプラトニ的な bonum commune としてあり、被造物がそこへと超出するものとして summum bonum と語られる。被造物が自己の内に持つ神との類似そのものが、bonum commune たる神への自己超越そのものであり、又その根拠でもあって、このことこそ被造物にとって第一の本質的なことであり、この自己超越による自己完成 (アリストテレスはこれを重視した) は二次的なことである。bonum は個々の存在者において現実には多であり、この具体的な個々の善のうちのみ実現されるところの善性そのものの特性に対応して、個々の存在者は存在によって自存しているのである。従って、アリストテレスの如く個々の善が現実には多であり、夫々の自己完成を持つことの重視によって、bonum commune を否む必要はない。そして、アリストテレスの *ὡς ἐρόμενον* (*Met.* XII) が果して神を究極的なものとして捉え、目的論を貫徹していることを示すものであるかどうかについては疑問がある。トマスはアリストテレスに基付いて、アイデアの離存 *separatio* に対する反論を展開していることは事実であるが、神の理性のうちにあるアイデアの範型因性という考えは堅持しており、アイデアが現実化されるのは、善の創造力によるのであって、しかもこのはたらきは、ネオプラトニズムにあっては形相因乃至は作用因として把握されていたのに対し、トマスにおいては善に固有な目的因性として解釈され、創造行為の自由、被造物の偶有性が確保されると共に、先立する絶対的善の完全性に対する有限な善の直線的依存関係としての分有が確立されているのである。

III

討論に参加して提出された問いは殆どすべて分有をめぐるものであった。特に、リーゼンフーバー氏の提題においては、創造のはたらきの諸契機と、被造物におけ

る絶対的善たる神への直接的超越の動きの対応が、神の善性と類似という分有の存在論的根拠に支えられて提示されたのに対し、泉氏の提題において、アウグスティヌスの *formatio* 的 *participatio* に対するアンセルムスの否定的思考の強調が際立たせた対照は、*Entplatonisierung* の語と共に、そもそも *participatio* を何として捉えることによって *participatio* の問題を論ずるべきであるか、とのプラトン哲学の核心をなす問題の基本的省察に討論の方向を決定付けたと言えよう。それは一方では、プラトンの一時期に強調される完全性の分有という分有把握に対する疑問として提出され、他方、アンセルムスの *quo maius cogitari nequit* という基本命題が、果して分有を否むものと言えるのであろうか、むしろその命題は分有を要請するものと言うべきではないか、そして又、アウグスティヌス的な *formatio* としての *participatio* をアンセルムスの *creatio ex nihilo* は包含し得るのでないか、等の問いとして提出された。討論は核心の問題に向いながら、又そのことの故に、のびやかな展開を見せたとは言いが、その一因は、アンセルムスの神存在証明における存在論的構造の論理的分析把握がきわめて困難であること、特に *bonum* の問題が存在論と結付いた形で提示されていないこと、存在把握の独自性にあると言えよう。このことは又、内面化を通して *incomprehensibile* な神に至ろうとするアウグスティヌスの道やその聖書解釈における釈義学的修練が、アンセルムスにおいて方法論としては立てられていない等のことも深いかわりを持っていると思われる。又、リーゼンフーバー氏の、トマスにおけるネオプラトニズム的創造解釈において重要な位置を占めている *esse commune* が、神自身、即ち *esse divinum* とは異なるものとして立てられているが、それ自身としても、又トマスの存在論の中でも、はっきりした位置付けを受けていないのではないか、との指摘があったが、トマスのネオプラトニズム受容にかかわるこの問題はそれ以上の展開を見なかった。又、分有と相拮抗しつつトマスによって総合されつつも、なお多くの問題を含むアリストテレスの原因論と分有との関係も、提題者自身の問題指摘にもかかわらず、討論の対象とされる時間的余裕を持たなかった。

提題者による説明ははじめの予定をかなり上回ったが、これは問題を展開するためにやむを得ないことであった。研究発表が少しづつずれて、シンポジウムの開始が30分おくれ、交通機関の故障により些かの時間的延長も許されなかった等の事情

もあり、又、司会者の非力の故に、多くの参加者に発言の機が与えられず、時間切れの様相を呈したことについては、すべて司会者に責任がある。又、発言が数少しい特定の人に偏したのではないかのご批判も後で承わったが、前回は受け、更に次回に及ぶプラトンと中世哲学との基本的なかわりについての討論が、哲学の問いとして一つの方向を以て開けて来る時に、その動きを人為的に制御することはかえってシンポジウムの本来意図するところを損うのではないかと思われる。真摯に自己の思索を提示して下さったお二人の提題者、提題者相互の打合せにも参加して焦点を明らかにすることに力添えいただいた方、又、提題者に劣らず自己の思索を披瀝しつつ討論に参加して下さったすべての出席者の方に深く感謝し、次回への期待をつなぎたいと思う。

提題 アンセルムスにおける 'Entplatonisierung' について

泉 治 典

F. S. Schmitt は *Analecta Anselmiana* Bd. I (1969) に寄せた論文 'Anselm und der (Neu-)Platonismus' の中で、アンセルムスにおける Entplatonisierung ということをはっきり言明した。なお Lat.-deutsche Ausgabe, A. v. C. *Monologion* (1964) の Einführung S. 20 ff. も参照されたい。シュミットは、アンセルムスがアウグスティヌスからプラトン主義ないし新プラトン主義的要素を〈自覚的に〉除去したと言うのであって、彼はこれを上掲論文で *Monol.* c. 1~4 のいわゆる宇宙論的神論証を分析しつつ示したのである。結論として、かつてボイムカーが中世の新プラトン主義の標識として挙げた次の6項目は、どれもアンセルムスには見られないと言う。1) 多に対する一の先行と、数の始源としての一というピュタゴラスのプロティノスの考え。2) 一であることと存在することとの同一視。3) 多は一の分有によって統一存在となるという考え。4) 即自的な一が分有による一に先行し、多の根拠をなすという考え。5) 事物は第一の一に近づくにつれて統一性と完全性をますという段階説、及び流出説。6) すべての多なるものは一への還帰を希求するとい